

●福井藩挙藩上洛計画

文久三年五月 (1863)

坂本龍馬が福井を訪れる。

坂本龍馬が神戸海軍塾の資金借用のため福井にやってきたのは、文久三年(一八六三)五月の二十日前後。文久三年は將軍家茂が二百三十年ぶりに上洛して攘夷決行の日を五月十日に約束させられ長州藩が外国船を砲撃するなどまさに開国が攘夷かで国が大きく揺れていた時であった。

政治総裁職に就いた春嶽であったが、長州藩を後ろだてとする尊王攘夷運動が京都で高揚し治安が悪化し、強硬な攘夷要求が起ったことなどから、文久三年三月に松平春嶽は政治総裁職の辞表を出し福井に帰藩していたのである。福井藩では横井小楠・三岡八郎(由利公正)などを中心に大評議が始まり、六月はじめには、春嶽父子を先頭に藩を上げて四千名の兵を率いて京に上り、その圧力のもとで京の治安を回復し、朝廷・將軍・公家・大名・雄藩要人・外国の外交官・尊皇派の要人らで大会議を開き懸案の諸問題を一挙に解決しようという計画を立てていた。立案者は横井小楠でいわゆる「挙藩上洛計画」である。三岡宅での三人の会談の内容は明らかではないが、福井藩上洛計画の主導的な役割を担った小楠や三岡としては当然のことながら藩論沸騰の事情を話したと思われる。この会談の結果として、当時危険な内外政局のもとでの「国論二分」の分裂的状況が、福井藩の内外政局でとりまとめ、対外関係を有利に導いていくことになった。

小楠の邸宅は私の家と足羽川を隔てて対峙している。ある日、龍馬の招きでそこへ来た。夜半に大勢で戸を叩く者がある。出てみると小楠が坂本と一緒にお船に上りて来た。そこで三人が船を泊めて話し始めたが、坂本が愉快極まって「君が為、拙者も命を惜しまねど、心にかかる國の行末」と自作の歌を詠じたが、その声調が頗る妙であった。翌朝、坂本は藩士と大久保に会いに行くという事で江戸に向かった。

三岡 八郎(由利 公正)
福井市立郷土歴史博物館蔵

福井藩士。文政十二年(一八二九)福井藩の下級武士(毛矢侍)に生まれた。横井小楠から財政学を学ぶ。構本左内らと国事を奔走し、松平春嶽から財政手腕を評価されて、藩札発行と専売制を統合した殖産興業政策で窮乏した藩財政を再建した。文久三年に坂本龍馬が福井を訪れた際に意気投合し交流を深めたが、その後「挙藩上洛計画」が頓挫し計画の中心人物であった三岡八郎は謹慎処分となっていた。大政奉還後の慶応三年十月(一八六七)に龍馬は、山内容堂からの親書を松平春嶽に届ける為に福井を訪れ、謹慎中の三岡八郎との面会を求め新政府がとるべき経済政策について相談している。龍馬の推荐により新政府の徴士参事となり「金穀出納所取締役」(初代大蔵大臣相当)として戊辰戦争や樹立間もない新政府の極めて困難な財政を支えた。

●坂本龍馬「せんたくの手紙」に見る

幕末福井藩との深い関係



坂本龍馬 高知県立坂本龍馬記念館蔵
天保六年(一八三六)月十五日 土佐郷土に生まれ、脱藩した後は志士として活動し、貿易会社と政治組織を兼ねた亀山社中(後の海援隊)を結成。薩長同盟の斡旋、大政奉還の成立に尽力するなど倒幕及び明治維新に大きな影響を与えた。大政奉還後の1ヶ月後に京都の近江屋で暗殺された。昨年のNHK大河ドラマ「龍馬伝」でも描かれ、司馬遼太郎原作の「龍馬がゆく」以来、幕末の風雲児として国民的人気を誇る。



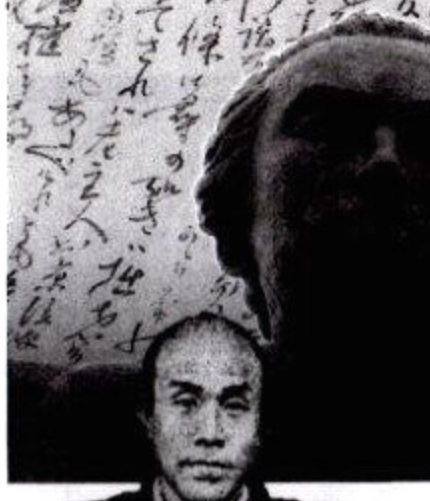
大勢にて候へとも
龍馬・三岡の大名
と云くそをかくし
同志をつり
朝廷より先づ神州
をたもつて大木をたて
夫より江戸の同志 大木
と心を合せ、右申所の
高更を一事に
置いたし、打殺
日本を今一度せんたく
いたし申候事二
いたすべくとの神
諭にて候、此意付を
大藩にもすこむる
同様に、使者を
内々下サル、事尚度
然し龍馬すしも
つかへをもとめず、實に
天下にふつたなき
事、これを以てする
べく、なげくべし

この手紙は龍馬が、文久三年五月に福井藩を訪れ横井小楠と三岡八郎と会談した後、六月二十九日に京都の福井藩邸の村田巳三郎を訪ね、時勢を論じた日に書かれた手紙である。龍馬の言葉の中でも特に有名な「日本を今一度せんたくいたし申候」とかかれたものである。手紙に書かれている大藩とは福井藩のことを指す。

六月二十九日に龍馬は京都の福井藩邸を訪れ、福井藩士村田巳三郎と攘夷運動の牙城となった長州藩の対外関係の危機的状況について話し合ったが、二人の意見は容易に折り合わなかった。ところが龍馬が七月一日にもう一度村田を訪ね、前日に引き続き激論を戦い合わせた結果、ようやく二人の考え方が一致した。その主な点は「天下の公論」によって長州藩の問題を処理する、対外交渉は、「道理」に基づいて談判を十分尽くすこと、そして国論の統一をはかり、もし戦争ともなれば挙国必死の覚悟で立ち向かうことであった。龍馬は、当時の偽らない心境をこの手紙のべている。つまりいよいよかれ自身の力量が發揮でき、「一藩」福井藩に見込まれたことに大きな自信をみせる。さらに米・仏の両艦隊が長州藩と一戦を交えたが、その敵艦を幕府が横浜あたりで修復して再び長州で戦っていることを知って、龍馬は大いに憤激し、「是皆幕吏の夷人と内通いたし候ものにて候。(中略)右申所の奏事を一事に軍いたし打殺、日本を今一度せんたくいたし申候事にいたすべくとの神諭にて候」と福井藩と協力して幕府の悪い役人達を粛清して、日本全体を浄化せねばならないと訴えている。

坂本龍馬の手紙「越行の記」新発見!!

坂本龍馬が暗殺される直前、土佐藩重臣の後藤象二郎に宛てた手紙の草稿と見られる文書が、東京都内で見つかった。新政府樹立に向けた構想などが書かれている。鑑定人の一人で京都国立博物館の宮川一・研究員は「龍馬の最晩年の動きを裏付ける資料は少なく、大変貴重だ。奇跡の発見だ。」としている。持ち主は30年以上前に古物商から購入したという。高知県立坂本龍馬記念館などが筆跡や内容などから「直筆」と判断した。日付がないことから草稿とみられる。記念館などによると、草稿は縦9.5センチ、横10.4センチで巻物に仕立てられている。「越行(えつゆき・越前行き)の記」と題され、後藤に宛てた福井藩への「出張復命書」。龍馬が1867(慶応3)年10月28日頃に福井藩を訪れ、藩士の三岡八郎と新政府樹立など国の将来について語り合った内容が書かれている。



同年11月5日に京都に戻った後に書いたとみられ、同日15日に龍馬は京都・近江屋で何者かに暗殺された。大政奉還直後に、国論を相談する為に向つた先に向かったのが福井藩であったことから如何に坂本龍馬が福井藩を頼りにしていたかが伺える。坂本龍馬を育てたのは福井藩といっても過言ではなく、この手紙の発見は幕末維新期における「福井藩」の「重要な役割」を今後、浮かび上がらせることになると思われる。

由利公正を財政担当に 龍馬直筆の推薦状

新政府構想 福井で議論
後藤象二郎宛て草稿発見
登用の経緯裏付け 県内研究者

由利公正(1829-1898)は、福井藩の下級武士(毛矢侍)に生まれ、横井小楠から財政学を学ぶ。構本左内らと国事を奔走し、松平春嶽から財政手腕を評価されて、藩札発行と専売制を統合した殖産興業政策で窮乏した藩財政を再建した。文久三年に坂本龍馬が福井を訪れた際に意気投合し交流を深めたが、その後「挙藩上洛計画」が頓挫し計画の中心人物であった三岡八郎は謹慎処分となっていた。大政奉還後の慶応三年十月(一八六七)に龍馬は、山内容堂からの親書を松平春嶽に届ける為に福井を訪れ、謹慎中の三岡八郎との面会を求め新政府がとるべき経済政策について相談している。龍馬の推荐により新政府の徴士参事となり「金穀出納所取締役」(初代大蔵大臣相当)として戊辰戦争や樹立間もない新政府の極めて困難な財政を支えた。

注意 5%